

DISASTER REPORT

東日本大震災を語り継ぐ

—震災体験から学び、伝えること—

公開版

2013.3.11

2011.3.11



目 次

| | 頁 |
|-----------------------------------|----|
| I. 巻頭言 ----- | 1 |
| II. 東日本大震災の概要 ----- | 3 |
| III. 震災当日以降の社内対応 ----- | 4 |
| IV. 東日本大震災レポート(震災体験から学び、伝えること) -- | 15 |

巻 頭 言



代表取締役会長

藤島 芳男

「震災レポート」発刊にあたって

平成23年3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、マグニチュード9.0、最大震度7を記録し、地震規模で世界4番目、日本では1千年に1度と云う未曾有の大災害となりました。巨大津波は東京電力福島第一原子力発電所をも被災させ、東日本全域に人的・物的被害をもたらすと共に、国内のみならず、世界にも極めて甚大な影響を与えました。

この東日本大震災によって我社では、社員のご家族4名の尊い命を失い、30戸余りの家屋被害(半壊以上)が発生しました。この紙面をお借りし、犠牲になられた方々に、哀悼の意を捧げますと共に、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

このレポートには、社員の皆様の被災体験、又避難を余儀なくされている中でのそれぞれの救命・救急・支援活動などを通しての様々な想い(大震災という自然の脅威に対する恐怖、建設コンサルタントとしての思いなど)が綴られております。

未曾有の大震災を被災地で直面した我々としては、その初動から復旧へのプロセスを記録として後世に残すことが使命と捉え、企画したものです。

皆様のご協力により、北は札幌営業所から南は東京支店まで、約二百数十通の貴重な報告が届けられ、発災後2年の節目に合わせ、内部資料として取り纏めることが出来ました。今般、この中から14編を選定し、社外にも、災害の記録・記憶として伝え広めることとしております。

被災地の願いである早急な復旧に立ち塞がって来た放射能や重金属等を含む災害廃棄物(ガレキ)処理が、震災から2年3ヶ月が経過し、ここに来てようやく復興も軌道に乗り始めました。三十数万人といわれる避難者の皆様の生活再建のためのまち創りが本格化しようとしており、救援・支援活動や震災復旧と云う初期段階から、今後は、復興・再生に向けた新たな展開を迎えます。

私たちは、この大震災から学んだ防災・減災・除染技術等を、将来予想される、東海・東南海・南海地震等の大災害への備えとなるよう、しっかりと伝承することが求められております。この「震災レポート」が、災害への備え・対策を講じている多くの方々の一助となりますことを、真に願っております。

巻 頭 言



代表取締役社長
遠藤 敏雄

東日本大震災「震災レポート」の発刊に当って

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分 東北地方太平洋沖地震が発生、M=9.0 の国内観測史上最大の地震でした。4 月 1 日に「東日本大震災」の命名されたこの災害は、巨大地震と巨大津波の被害だけでなく、東京電力福島第一原子力発電所の事故の被害とその後の風評被害が加わる大災害となりました。それから2年経ちました。

宮城県だけでも、死者・行方不明者 1 万1千人を超えて、尚、関連死の報道が止まない。全壊・半壊の住宅は 22 万棟にも及ぶなど、甚大な被害となりました。多数の尊い命とかけがえのない夢を奪われた方々にご冥福とお見舞いを申し上げます。

当社は、東北地整や宮城県、仙台市を始めとする各市町村の支援を行なって参りました。また、協会のリーダー的な役割を果たし、学会等の活動に参画し、社内外において災害復旧に当って参りました。これまでも4つの大きな地震や豪雨など何度も大きな災害を乗り越って参りましたが、これ程の災害規模は未経験で、地震直後に立ち上げた対策本部は未だに解除されない状況にあります。社員各位の復旧・復興への想いが少しずつ被災地に具現化されるようになり、報われるようになって来ました。

社員各位から震災レポート(社員の体験と決意)の手記を頂きました。提出者 220 名とほぼ全社員が 3.11 に対する行動や決意など色々な思いを寄せて頂きました。自らも被災者であり、家族の苦しみや悲しみ、絆、当社の使命として復旧・復興に不眠不休で当たられたことなど、今後の復興や災害対応、会社としての課題など、大変貴重な資料であり財産となるものと期待しています。このレポートのほんの一部ではございますが、広く、公開することによって、個人や企業、行政の方々の今後の防災対策に生かされることを切に願っております。

以上

II. 東日本大震災の概要

1. 地震の概要

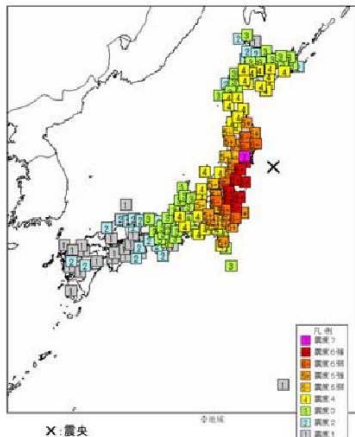
平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震

○地震の概要(気象庁)

1. 発生日時 平成23年3月11日(金)14時46分頃
2. 震源及び規模(推定)
モーメントマグニチュード **Mw9.0**、深さ約 24km
三陸沖(牡鹿半島の東南東130km付近(北緯38.1度、東経142.9度))
3. 余震:**M7.0以上6回**、**M6.0以上93回**、**M5以上560回**

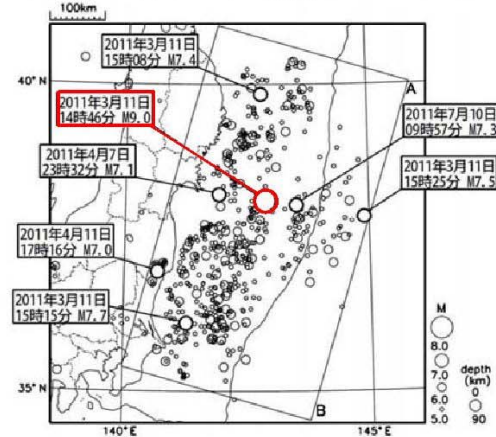
出典:
「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」について
(第55報)(H23.9.816:00)

平成23年3月11日14時46分頃の三陸沖の地震
震度分布図



出典:平成23年3月11日14時46分頃の三陸沖の地震について(H23.3.11気象庁)

震央分布図
(2011年3月9日~9月8日16時00分、深さ0~90km、M≥5.0)



出典:「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」について(第55報)(H23.9.816:00)

※出典:中央防災会議「東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会」

報告資料より

2. 被害状況

(1) 人的被害

- ・死者 15,880名
- ・行方不明 2,700名
- ・負傷者 6,132名

(2) 建築物被害

- ・全壊 128,914戸
- ・半壊 268,897戸
- ・一部破損 733,792戸

※出典:緊急災害対策本部「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)について」

報告資料より

Ⅲ. 震災当日以降の社内対応

1. 震災対応 (3.11 東日本大震災)

当社の使命の一つは災害からの復旧・復興のお手伝いをすることです。これは戦後、日本国土の復興建設を目的に「社団法人復興建設技術協会」が設立され、その組織が社団法人から株式会社になり現在の当社に至った経緯からです。その時の目的を忘れず、後々まで意思を引き継ぐことを使命として社名に「復建」の2文字を残しました。

平成23年3月11日14時46分に太平洋三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生し東日本大震災が起きました。これにより東北から関東にいたる広範囲に甚大な被害をもたらしました。当社では、当時作成中のBCPを3月14日の執行役員会で諮り正式に運用を開始する予定でございましたが、その直前に震災が起きてしまいました。全社員に対する説明会もしていない状態ではありましたが、このBCP原案をベースに震災対応にあたりました。

1-1. 東日本大震災における当社の責任

発災以降、行政側からいかなる震災対応要請があっても「決して断ることのないように！」というトップからのコミットメントが出されました。これは、災害に対し東北に拠点を置く建設コンサルタントとして、復旧・復興に全力を投入する責任があるということであり、間違っても要請を断る様なことがあれば、被災対応に追われる国や地方自治体の行政活動に支障をきたし、被災者住民が大変困ることになるからです。

従って震災対応は、あらゆる手法を駆使・活用して応える。これが震災時における当社の使命であり責任です。

1-2. 震災時直後の社内状況

地震直後、社内は停電し非常灯だけが点灯していました。電話の親回線は使用できましたが、子回線や内線電話は、交換機のバッテリーがなくなると使えなくなりました。

大きな揺れで机の上や棚に置いてある書類などは散乱しました。本社3階で壁に固定されていた移動式の書棚が連鎖して転倒し、その倒れた棚で机の上のパソコンが1台壊れました。棚やパソコンの被害はここだけで、これによる人的被害がなかったことは不幸中の幸いでした。



地震直後の社内の状況(停電)



抜けた固定金具



金具の抜けた後の壁

転倒した移動式の書棚(3Fフロア)



地震直後の避難状況

1-3. 震災当日の社員の帰宅（帰宅支援セットの活用）

地震発生後、帰宅を希望する社員には帰宅の許可が出され、16時頃には帰宅可能な社員のほとんどは退社しました。帰宅できない社員や、また外部からの連絡に備え留守番をする社員など、一部の社員は会社に残りました。

地震の影響により公共交通機関の交通はすべてストップしていましたので、帰宅する社員のほとんどが徒歩による帰宅でした。当社のBCP(事業継続計画)により、震災時の帰宅困難を想定し、本社に帰宅支援キットを備えておりましたので、遠方に帰宅する社員は、この帰宅支援キットを持って帰宅しました。

このときに分かったのですが、帰宅支援キットの小型電灯の乾電池が入っていませんでした。急遽乾電池を社内からかき集めて対応しました。

この震災の経験から、帰宅支援キットや備蓄品等の見直しがされました。帰宅支援キットでは、乾電池のほか夜の暗い道路を歩く事を考慮し蛍光タスキが新たに準備されました。

備蓄品では、災害時用の発電機、省電力タイプのFAX複合機、衛星携帯電話、その他マスクやティッシュ、トイレトーパーなどを新たに備え、備蓄食料を増量しました。

備蓄品等を見直し、追加購入した内容

①帰宅支援キットの見直し・購入

- ・ 追加品：乾電池（小型電灯用）、蛍光タスキ（夜間歩行用）、
- ・ 備蓄先：支店にも帰宅支援セットを購入

②備蓄品等の見直し・購入

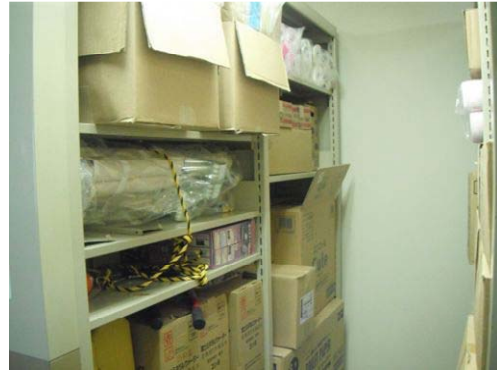
- ・ 機器類：省電力タイプのFAX複合機、発電機の購入（災害本部用）、衛星携帯電話
- ・ 備 品：マスク、ティッシュ、トイレトーパー
- ・ 食 糧：缶詰、災害備蓄用パン



帰宅支援キット



発電機(震災後購入)



備蓄品置場の状況

1-4. 震災後の状況

(1) 災害対策本部の立ち上げ(3月11日)

急遽、緊急災害対策本部を社長室に立ち上げました。
以下は時間を追っての緊急災害対策本部の風景です。



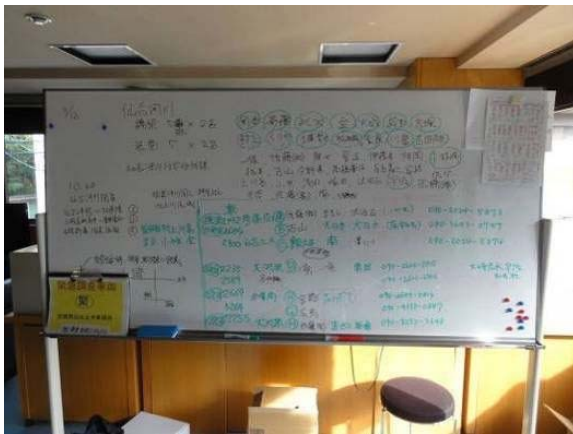
社長室に緊急災害対策本部を設置

※写真は 3/17(木) 11:52 撮影

(2) 緊急災害対策本部の立ち上げと時間経過状況



3/12(土) 15:24 本部の様子



3/13(日) 8:20 事実経過の記録



3/13(日) 8:20 本部の様子



3/13(日) 9:36 報道の様子



3/14(月) 13:30 本部の様子

(3) IT 機器周辺野の回復経過の状況

3月11日

- ・14時47分地震発生。長いゆれが3分ほど継続
- ・停電、重いものが移動、3階移動式書庫が転倒(けが人なし)
- ・緊急災害対策本部まで災害優先電話の線を配線。固定/携帯電話は不通
- ・電話交換機は3月11日17時頃にバッテリー切れにより、社内通話不通になる
- ・サーバ室内で転倒はなし確認、UPSで動いていたサーバを手動停止
- ・災害用携帯電話で、安否確認を開始

3月12日

- ・緊急災害対策本部の電話、小型TV、ノートPCが使える状態になる。
- ・停電は22時に一時的に回復。しかし夜中1時頃また停電

3月13日

- ・点検で屋上のキューピクル(ビルごとの変電設備)に漏電、自動切断
- ・100V系は午前中に回復、エレベータなど200V系の電気系統は停電
- ・午前中に温度監視しながら、社外通信系のサーバの縮退運転開始
- ・復建6社仲間にキューピクル特殊部品の注文を依頼
- ・盛岡支店には通信の二重化設備を導入済みであるが、盛岡の停電のため稼働せず



サーバ室冷却のため雪の塊を利用



送風機による室内風循環

3月14日

- ・調査防災部員が山から雪を運んできてくれる
- ・サーバ室に雪の固まりを入れ、一部サーバを運転開始

3月16日

- ・キューピクル特殊部品、復建調査設計が手配、東京に到着
- ・東京支店の車で、仙台までの移送を依頼

3月17日

- ・キューピクル特殊部品、仙台に到着、ユアテックさんに修理してもらう
- ・午前中に空調設備回復。サーバ全面運転
- ・水周りも復旧(ただし3階は配管から水漏れ発生)
- ・夕方にはエレベータの点検が終了して回復

(4) 安否確認

電子メールによる安否確認は、3月14日から開始しました。14日までに91名から安否確認のメールがあり、これ以降も安否確認を続け社員全員の無事を確認できました。しかし、安否確認後、1名連絡が取れなくなった社員がいました。下記は震災後1ヶ月後の社員の安否、家族・自宅の被災状況の集計結果です。連絡の取れなかった1名の家族・実家の状況が未確認となっていますが、後日、自宅が被災したため親戚の家にいることが確認されました。

| 2011/4/11 時点の社員の被災状況 | |
|----------------------|----------------------|
| 社員 291 名中 | 全員確認 (派遣社員等含む) |
| 社員の無事 | 全員無事 |
| 家族・実家の無事 | |
| 死者 | 3 名 (実父 1、義母 1、祖母 1) |
| 行方不明 | 1 名 (実母 1) |
| 未確認 | 1 名 (1 名の家族・実家が未確認) |
| 家屋 (自宅) | |
| 床上浸水 | 2 戸 |
| 被害 (重) | 6 戸 |
| 被害 (軽) | 33 戸 |
| 未確認 | 2 戸 |
| 家屋 (実家) の被害 29 戸 | |

(5) 物資の調達

本社のある仙台は、震災の影響により、あらゆる物資の調達が困難という状況が暫く続きました。比較的影響の少ない支店に連絡し、物資の調達を行いました。例えば福島支店には新潟県まで車を走らせ、下記の物資の調達をしました。現地調査に必要な道具や、常備品の薬、食糧(非常食)などです。

- ・薬 (風邪薬、腹痛、解熱、バンソーコー他)
- ・デジタルカメラ、乾電池 (単4、単3、カメラ用メモリー)
- ・ポール、チョーク、トラチョッキ、マーカー、測量テープ、付箋
- ・炭、カップラーメン、栄養補助食品、携帯食料、海苔、ふりかけ
- ・カセットコンロのガスボンベ

(6) 燃料（ガソリン）不足の対応

この震災でガソリンの供給不足が発生しました。被災地では、国の機関や自治体、民間企業、一般の方もガソリン不足の対応に追われました。スタンドそのものが震災により、機材の転倒や停電による機能停止、更にはスタンドにガソリンを補給する車両が、被災地に来ること自体が困難な状況になっていました。

震災の緊急点検等の要請が来ても、ガソリンが無ければ対応できません。そこで当社は、下記の対応により、車の燃料確保に努めなんとか対応いたしました。

①災害緊急車両指定

加盟している協会と地方自治体等との間で交わしている災害協定に基づき、当社の車両も災害緊急車両指定を受けました。ガソリンスタンドによっては、優先的に扱ってくれるところもありました。高速道路は緊急車両のみの通行が認められていましたので、高速道路のS.A.のガソリンスタンドでの給油が可能でした。S.A.のガソリンスタンドも長蛇の列ができたり、給油量制限が設けられたりしている状況でした。

②ガソリンスタンド情報の共有

営業しているガソリンスタンド、緊急車両を優先または専用で給油してくれるガソリンスタンドなどの情報を共有し、ガソリンの入手に努めました。電話などで情報交換し、サイボウズ(グループウェア)で情報を共有しました。

③携行缶によるガソリン集め

ガソリン用の携行缶を持って、ガソリンスタンドをめぐり、ガソリンの確保に奔走しました。携行缶も少なかったのですが、購入・借用する等して対応しました。

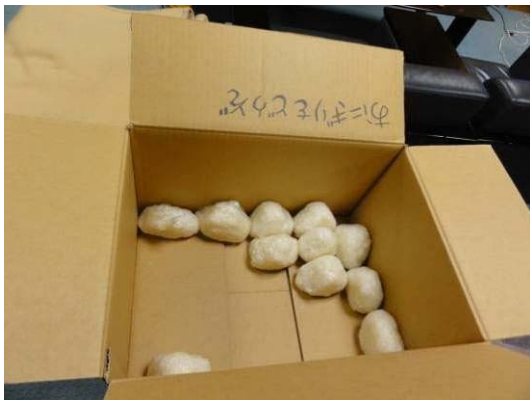


ガソリンの携行缶

1-5. 従業員のための対応

(1) 食料確保の支援（炊き出し、休日の振り替え等）

今回の地震の影響により、物流が麻痺し、食料の調達が困難な状況でした。震災に備えた備蓄品の食料は、備蓄品のビスケットや水で食べられるご飯などが少量の食糧しかありませんでした。地震後いろいろなところから米や野菜、漬物、お菓子、カップ麺などの支援物資が会社に届きました。この食料を使って炊き出しを行いました。おにぎり等を朝早くから準備し、現場に出かける社員や、食料調達が困難な社員に配りました。



おにぎり、味噌汁の準備状況

(2) 社員の帰宅支援

震災により、JR や地下鉄などの公共交通機関が一部利用できない状況でした。これを受けて、自転車やバイク通勤、徒歩通勤に切り替える社員もいました。会社では、帰宅困難者に対し、社有車ででの乗合通勤や、臨時社宅として近くのマンション・アパート等を契約し利用できるように対応しました。

1-6. 当社が受けた支援

(1) 支援金・支援物資

震災直後より、社員及び社員の家族や親戚、取引企業や知人など多方面より多くの支援物資や支援金などを頂きました。お米や野菜、漬物、お菓子、カップ麺などの食料品をはじめ、ロビーは頂いた支援物資で溢れていました。

頂いた支援物資のうち、食品等、会社で消費しきれない支援物資は、社員に有償還元し、それで得たお金は被災地への支援金として役立てました。

会社に届いた義援金は、会社慶弔見舞金とは別に、半壊以上の被災社員および親を亡くした社員への支援金として支給しました。

震災の影響により、食料調達が困難な状況でした。多くの社員は、食料を調達する時間も無く震災対応に追われていました。この食料支援により、社員は震災対応業務に専念できました。

また、コピー用紙、乾電池、ティッシュなどの実用的な様々な物資も頂きました。地震で故障した本社ビル高圧電源部品の調達にも色々な方のご協力で、早い復旧が出来ました。乾電池やティッシュ1個ですら入手困難な状況に陥っていましたので、大変助かりました。

暖かいご支援を頂いた100を超える個人・団体の皆様、本当に有り難うございました。



頂いた支援物資(食料品)



頂いた支援物資(お米、調味料、ほか)



頂いた支援物資(コピー用紙、ティッシュなど)

IV.東日本大震災レポート

－震災体験から学び、伝えること－

3.11 私のそのとき

事業企画副本部長 A.H

1. 地震から帰宅

完了検査のために〇〇君・〇〇君と仙台河川国道事務所3階の調査課で準備ができるのを待っているときだった。強烈な揺れに襲われ、書棚のファイル類がバタバタと倒れ落ち、そのファイルで足元が埋まっていった。いったんおさまりかけてもまた揺れる。梁や透明な仕切り板が音を立ててひびが入っていく。2度目の揺れがおさまりかけたとき、会議スペースのテーブル下に潜り込む。3度目の揺れがおさまったとき、職員の方々と一斉に玄関前に飛び出した。携帯を会社に置いてきたので、〇〇君に無事メールを一緒にいれてもらう。信号が止まっているのに国道4号を車が平気で走っているのが不思議だった。応援を頼むことになるからよろしくと言われてたところで帰社することにした。途中、市内のビルの倒壊は見られなかったがタイルやレンガが剥離して落ちているのが目だった。帰宅しようと歩いている人たちが多かった。駅前で、渋滞で動かなくなったため、車からおろしてもらい歩いて帰社した。

会社では、ほとんどの人はすでに帰宅していた。社長室に対策本部が立ち上がっていたが、停電でもあり、まだ無事確認程度しか機能していなかった。一階の総務には灯りがないので、駐車場の車を室内にむけ照らした。出張用に使っていた古いワンセグ付きのポータブルナビをその車につけておいた。扇町方面で働いている妻と娘に連絡がとれ、二人は一緒に帰宅しようとしていることがわかった。東京の息子とも連絡がとれ実家に無事を知らせてもらう。8時くらいまで様子を見て、総務副部長から帰宅セットをもらい帰ることにする。途中、ビバークも覚悟して、家まで18km、4時間も歩けば帰着くだろうと、ヘルメットにドカジャン姿でひたすら歩く。時々、向こうから歩いてくる人が仙台駅の方向とか小学校はどこかとか聞いてくる。出張で来ているんだな、気の毒にと他人事に哀れむ。45号を東に行く車の流れは悪い。ラジオ聴きながら歩く。荒浜のニュースと空港が浸水していること、仙台港で10mの津波、東北石油が燃えているというニュースがあるが近場の状況はまったく放送されない。我が家の標高は9mぐらい(実は7m弱で今は6.5m)で海岸線より700m程離れているため10mの津波では大丈夫のはずと思っていた。そして、もう津波は引いているはずだから低い貞山堀付近のだけを迂回すれば帰路は何とかなる。多賀城駅まで行けばバイクもあると、まだまだ余裕があった。苦竹インターの歩道橋は、一部封鎖で電線がたれさがっていたりしているが落橋はしていなかった。ここで多賀城方向から来る自転車に乗った若者に利府のほうへの行き方をきかれた。多賀城付近が水没しているとのことだった。まだそこまでは1時間もかかるしそのうち引くだろうと思って進んだ。車はほとんど進んでおらず歩く方がはるかに早かった。

中野栄で警官や消防車が居り、ここで通行止めになっていた。車は仙台方面にUターンしたり、10~20cmぐらい水につかりながら育英学園のほうに走っていた。津波からもう6時間はたっているのにまだ水が引かないのが不思議だった。45号を戻ってくる人に聞くと、三陸道から向こうは自動車が3段積だという。

思案していると、多賀城駐屯地に応援に来た自衛隊のマイクロバスが停まっていて乗せてくれ、ここで十数人が一夜をすごした。帰宅セットの飴を配った。翌早朝、樋ノ口橋を渡り多賀城高校付近でおろしてもらった。東北石油からはもうもうと煙が上がっていた。貞山堀ではたくさんの船が陸に打ち上げられていた。やっとたどり着くと、わが汐見台南は、両側の田んぼが海になっていた。団地中央にある銀行やスーパーの一階のガラスがやられている。団地北側の田んぼから押し寄せ乗上げてきた津波だった。道路や周辺には、流された瓦礫や車が溜まっていた。汐見台南の入り口にある調整池を渡る汐見橋も、路面を津波が走り、我が家の少し手前までその痕跡が残っていた。我が家は、窓が1枚外れて落ちていたが幸いガラスは割れていなかった。中に入ると、テレビがひっくりかえっているのと、食器が2~3個割れていた。家族も帰着き、家は午前中で片付いた。多賀城駅まで送ってもらい、ここから無事だったバイクで午後には出社できた。

2. 福島原発爆発

3月12日 1号機の建屋の爆発が社長室対策本部のテレビに映っていた。現場用の貧弱な発電機が一台、携帯の充電にも活躍していた。原発が爆発した・日本はこれで終わったかとも思った。プルサーマルをはじめていたので、性質の悪い放射能も大量にでてい→チェルノブイリ並みになるだろう。10キロ圏だとか 20キロ圏だとか騒いでいる国やマスコミは、なんととぼけたことを言っているのかと思った。冬型で西風が吹いている間は良いが、風向きが変われば 100kmの仙台だってやばいと恐ろしくなった。電気が回復したのは13日だったか14日だったか。サーバー室のエアコンの電源がやられていた。雪を取ってきてもらい、冷えた空気を扇風機でサーバー室に送りこみ、社内のパソコンが使えることになった。

天気予報では、日本海に低気圧が発生し15日にはそれが横切り天気が崩れそうだった。HBC北海道放送の「専門天気図」にアクセスし高層気象や予想用の各種データを見てみる。地上の風が一番近い850hp(1500m)の高層天気図の予想で判断すると15日には東南の風の可能性が高い。雨の降り始めは、大気中の浮遊物質をたっぷり吸って落ちてくる。原爆の後の黒い雨もそうだったし、酸性雨もそうだ。自衛隊では、雨に当たらないようにとの通達を持っているという情報も流れてくる。14日には3号機も爆発していた。みな疲れてきているから明日は雨であれば休ませると常務も言ってくれる。14日夕方、技術本部長通達ということで、雨に濡れないようにとかのメッセージを出してもらおう。

事後にわかったことは、福島ではこの3月15日、その最悪の日が起きていたことである。2号機、3号機、4号機と爆発や火災等放射能漏れは連日起きていたが、幸いほとんどの日は西風であり陸地への影響はほとんどなかった。冬型が崩れ東南の風となり、そして2号機から放射能が大量に漏れ出た3月15日のたった1日のみで、福島のみにとどまらない深刻な放射能汚染が起こっていたのである。そして、その時、放射能汚染の中を流れてくる方向に多くの人が避難していたのである。

趣味の山登りのために、ちょっと気象をかじっただけのただの土木屋が、少ない限られた情報でもほぼ想定し得る事象を、国や気象庁やマスコミや東電は、想定できなかつたか、隠し通したのである。その後の、排水マスからの汚染水漏れ事件等々、自分が乗り込んだ方がよっぽどまともな指揮ができると思うほどであった。

私はこれまで原発は、汚染物の処理や特にメンテ技術・耐震性技術が未確立であるが、その立場の人たちは、立場上やむを得ず安全・安全と嘘の宣伝しているのであり、メンテのためのロボット技術などを早急に確立しようと必死に研究しているんだろうという認識であった。しかし、ここまでいい加減な無能力者、そうでなければ反国民的な人達に、命に関わる安全と日本のエネルギーがゆだねられていたのかと思うと、この上なく腹立たしかった。コントロールもできず、また国民の安全を第一に考える倫理も持ち合わせていないのならば、早々にあきらめ代替エネルギーに切り替えていくべきであろう。その方がはるかに、ビジネスチャンスもでき国際的にも技術競争力がつくであろう・・・と確信するようになった。

この大地震と津波は、自分の立ち位置を明確にしてくれたように思う。そして、この続きは、被災者は当然ながら、私も会社もまだ終わっていない。被災した人たちへの支援、復旧と復興、そしてこの大被災の経験から得られた知見を、来るべき関東・東南海への備えるために使うようがんばりたいと思うこのごろである。

以上

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生した東日本大震災の記録・記憶を以下に示す。

1. 震災当日の状況

委託業務の協議資料を発注者にメール送信(14時40分)、その後の確認電話終了直後に、東北地方太平洋沖地震(仙台市青葉区:震度6弱)が発生した。

勤務場所は青葉区の本社 1F、大きな揺れを感じ机の下に隠れたが大きな被害は無い。曇り空と停電のため、非常灯のみの社内は薄暗い。携帯のワンセグで情報収集するが被害が大きすぎて報道関係もパニック状態であった。

その後、会社に1時間ほど滞在し原付で帰宅(仙台市青葉区)するが、雪が降り始め次第に強くなっていく。自宅に大きな被害は無く、一部衣装ケースが倒れた程度であった。

この頃、妻と携帯メール(ドコモ)で連絡が取れる。その概要は以下の通り。妻は津波に遭わず幸運だった。

私(15時12分)妻に安否確認メール送信
妻(16時10分)松島運転中に地震遭遇、現在は矢本
私(16時23分)家の状況報告と子供の安否確認を依頼
妻(16時26分)保育園と連絡取れずと報告
私(17時10分)仙台の状況報告(水道は通水)
妻(17時24分)大渋滞のため帰宅時間不明と報告
私(17時41分)会社待機を報告
妻(18時03分)未だ保育園と連絡取れずと報告
私(18時36分)社有車で保育園に向う
私(19時48分)子供達と合流、会社に向うと報告
妻(20時06分)富谷に到着と報告
妻(22時54分)錦町に到着と報告

その頃会社では、近隣社員が自宅から石油ストーブを持ち込み暖を取り、車のバッテリーとポータブルTVで情報収集を行っていた。

家族合流後、1時間程会社に滞在し帰宅支援セットを持って帰宅した。帰宅後は、ノートパソコンを照明に、妻が途中購入したパンと水でお腹を満たし就寝した。

2. 震災翌日から1ヶ月程度の仕事

震災翌日は10時に出社したが、既に20人程の社員が居たと記憶している。社長室の災害対策本部では震災対応の人員配置をしており、私は3/13(日)の磐城方面の橋梁点検を指示され、16時に帰宅した。

3/13(日)は8時半に会社を出発し、国道4号、49号を経由し昼過ぎに磐城に到着した。途中、福島市内のコンビニでは食べ物を入手できなかったが、川俣町のラーメン屋で昼食を取ることができた。国道6号を南下しながら橋梁を点検、鮫川大橋付近で日没のため作業を終了し、25時仙台に戻る。この時、小名浜付近で初めて津波の被害を目の当たりにする。帰り途中、平田村や郡山市のスーパーなどで、日用品(特に紙おむつ)と缶詰・インスタント食品を購入することが出来た。

3/20(日)は、仙台市若林区の橋梁点検に向かった。この際、仙台東部道路を境に、被害の状況が全く違う現実言葉に失う。

その他の災害現場は、仙台市青葉区の住宅地の地すべり、福島県や宮城県石巻市方面の津波被害の調査を行った。特に石巻市の状況は酷く、調査箇所が水没した場所もあった。

現場に出ない日は、炊き出し、PCや自転車を利用し、道路状況や物資の供給状況調査を行っていた。

3. ライフライン：仙台市青葉区

- 電気：地震直後に停電、3/13(日)夜に復旧
※4/7の余震の際も停電、翌日夕方に復旧
- 水道：震災当日夕方に断水、3/19(土)夕方に復旧

オール電化住宅のため、通電後は調理可能であった。ただし、水道が復旧するまで、自宅でシャワーを浴びることが出来なかった。また、暖房はエアコンのみであったため、知人から反射式ストーブと灯油を借り、暖を取るほか湯沸しも行った。

給水は、数日はエコキュート内の水で、その後は会社で行い、自転車に積み持ち帰った。週の中頃からは小学校の水道が復旧した。24時間開放のため、人の少ない夜に給水を行った。なお、震災後初めての洗濯は3/16、シャワーは3/17ともに会社で行うことができた。

自宅トイレは、節水タイプのため、エコキュート内の水と給水した水で対応できたが、近所の状況を聞いた際、トイレ用の給水が大変とのことだった。

4. 生活環境

- 生活物資：一時的に入手困難、燃料や食料不足が深刻
※十分な供給量に戻るのに3週間程度かかった
- ごみ処理：3/15 家庭ごみ、4/5 資源ごみ、4/25 プラスチック収集再開

3月の寒い中、燃料不足は深刻であった。灯油やガソリンを求める長蛇の列が、再開未定のガソリンスタンドでも見られた。なお、東北地方のガソリン供給は、4月に入ってから正常に戻った。

食料品については、仙台市内は週明け3/14から営業を再開する店舗も出たが、購入するには数時間並ぶ必要があった。週末にかけて再開する店舗が増え、場所によっては30分程度並んだだけで購入可能であったが、牛乳や納豆・豆腐などの加工品が不足していた。

また、仙台市のごみ処理が不能となり、復旧まで家庭で保管する必要があった。

以下に、この時期に購入した生活物資の状況等を示す。

- 3/13 缶詰等、紙おむつ(平田村、郡山市)
都市部を離れると比較的商品が残っていた
- 3/16 缶詰・インスタント食品等少々
近所のスーパーが開店したが、必要なものは買えず
- 3/18 米、生鮮食品全般、医薬品少々
生協は100円均一で10点/人の制限有り、日中は開店する店舗も多いが在庫は極めて少なく、本当に必要なものは購入できない。ただし、近所の小さな商店では肉、野菜がほとんど並ばないで買える場合もあった。
- 3/22 生鮮食品、加工品(納豆、豆腐、牛乳)
加工品は不足していたが、ある程度購入することが可能になった(種類は極めて少なかった)。
- 3/24 震災後初の外出(ファミレス)
メニュー限定で開店する店舗が増え始めた。
- 3/25 生鮮食品、加工品全般、ガソリン(満タン)
- 3/27 生鮮食品、加工品全般
ガソリンはネット上で開店・数量制限を確認し、朝から3時間(2km程度の車行列)並んで購入した。

5. 消防団

地震直後から、避難所運営を開始し、3/23まで団員が常駐した。避難してくる人は、近隣住民のほか、出張中の会社員などが多かった。中心市街地のため、近隣の食品メーカーから支援物資や飲食店の炊き出しなど、食の環境は恵まれていた。

また、若林区の被災地区捜索に協力した。私の出動(3/27)段階は、津波で流失した財産の捜索であった。

以上

大震災と自分を振り返って

設計部 T.I

その日は、朝から肌寒かったと記憶しています。9時から始まる仙台市立七北田中学校卒業式において、私は中学校のPTA会長として、初めて来賓祝辞するので緊張した朝を迎えました。祝辞の内容は、日々の生活における地域の方々との連携の必要性や、将来は社会のために役立つ大人になることへの切望だったと記憶しています。

滞りなく式が終了すると、ネクタイの色を変えてそのまま〇〇国道出張所で開催される工事調整会議に向かいました。出張所隣のプレハブで、総勢 10 名程度で〇〇工事に対し設計コンサルの考え方を説明していた最中に、マナーモードに設定していた数台の携帯電話から聞き慣れない音が同時に鳴り出しました。数秒後に大地震が発生しました。プレハブ全体が移動するほどの横揺れを感じ、打合せテーブル上のお茶のほとんどが広げた図面を濡らしました。

揺れが収まった瞬間、全員が駐車場に駆け出し見た光景は、大きく割裂した出張所の基礎コンクリートと、表面が凹凸に沈下したアスファルトでした。誰もが甚大な地震であることを体で感じ、体験したことがない何かが起こると身震いした瞬間でした。〇〇建設監督官の「工事調整会議は中止にする。帰れなくなるかもしれないので大至急会社に戻れ」の言葉により、当時の会社があった市内の上杉に向けて車を走らせました。

4号バイパス北上ルートを選択し、千代大橋を通行中でした。信号が大きく傾き、架線が車を塞いで大渋滞の発生でした。会社から連絡が入り、自宅への帰宅命令により、迷わず仙台港まで迂回し利府経由で免許センター方面を選択しました。ラジオから津波情報が聞こえましたが、家族の安否が気になりほとんど記憶に残っていません。車を走らせたルートが津波被害にあったことは、夜になって初めて知りました。九死に一生を得たと、今でもふと考える時があります。

翌日の午後、学校の様子が気になり七北田中学校へ向かいました。卒業式直後の震災のため、スーツ姿の先生方が避難された方の世話をしていたことと、一部の子供達はその補助をしていたことに本当に頭が下がりました。

校長先生と教頭先生に学校の中を案内され、増築した側の教室の大きな傾きと、一部のコンクリート柱のせん断破壊は、橋梁設計技術者として一目で分かりました。今まで損傷が大きい多くの橋梁を現場で見てきたので、学校建屋の損傷は大した被害では無いと仙台市と学校側に後日意見を申し上げましたが、少しでも不安要因がある中で子供たちを学校内には入れられないとの回答に同意せざるを得ませんでした。5月になってようやく新年度が始まりましたが、仙台商業のプレハブと隣接する小学校を間借りし分散しての学校生活を余儀なくされ、当然ながらPTAとして十分な活動はできませんでした。ようやく校庭にプレハブ校舎が設置され、教職員と全校生一緒に授業再開できた頃は、紅葉の時期だったと思います。

一年後の卒業式、私は震災を経験した卒業生に対し「普通の大人になることを目指して下さい」と、はなむけの言葉を贈りました。【普通の大人なら誰でもなれると思っていませんか？家庭を持ち、子供を育て、教育を受けさせ、社会に出るまで面倒みるということは決して楽なことではありません。普通の生活が出来るということは、家族が精一杯の愛情を注いでいる結果であることを分かって下さい。普通の大人になるのはとても大変なことです】と。

震災の12日前に他界した父と、福島第一原発事故の影響で誰も居なくなった田舎の実家に1人で生活している母と、未だ普通の大人になれない自分にもどかしさを感じながらも、復興の仕事ができる今の環境に感謝しています。

以上

< 激しい揺れです！ >

平成 23 年 3 月 11 日 2 時 46 分、緊急地震速報とほぼ同時に激しい縦揺れ。「これはやばい！」と思いながらもほんのちょっと余裕をみせて、最初の横揺れを右手のコーヒーをこぼさないよう耐え、「やっと収まってきたかな・・・」とホッとしたところに激しい横揺れ。あわてて後ろの作業テーブルの下に飛び込んだ(自分の机の下は入るスペースが無いので)。あとはなすすべなく・・・。仙台市青葉区震度 6 弱。正式名、東北地方太平洋沖地震、1000 年に一度と言われる大地震であった。

すぐに情報が入る。宮城県北部で震度 7 らしい。震源は三陸沖と思った。「実家は大丈夫であろうか。家族は大丈夫であろうか。うん・・・たぶん大丈夫。」

しばらくして津波の情報が耳に入る。気仙沼で 6m、仙台新港で 10m の・・・。「・・・何じゃそれ」。

< 心配ごと >

親類の多くは大船渡や陸前高田にいる。母の実家も大船渡市三陸町の越喜来というところにある。いちばんの海沿いは、大船渡市内のマイヤのすぐ隣にある光研社(文房具店)である。たぶん流されている。皆逃げたであろうか。母の実家は・・・高台にあるからたぶん大丈夫であろう・・・。

< 母の実家のこと >

一週間ほど経ってようやく母と連絡が取れた。実家が流されたことを知った。住んでいた伯父が行方不明とのこと。信じられない思いだった。

母の実家は屋号で“澤”と呼ばれる。昔、“澤の家”は今よりも海側の低いところに建っていて、明治の三陸津波の際に流されたと聞いたことがある。母の祖父は子供の頃にこの津波に流され、翌朝、木の上に引っかかっているところを助けられたとのこと。

今の“澤の家”は伯父が建てたものである。明治三陸津波が到達したいちばん高いところにさらに石垣を積んで建てた家。子供の頃は、毎年、盆、正月と遊びに行ったものだ。伯父については、母にとっては厳しい兄であって、いつも怒られていたとのこと。それを聞いて自分も若干怖いイメージがあったが、それでも毎年ここに来るのを楽しみにしていたものだ。夢であってくれれば良かったのに。

< 現 実 >

岩手県警のホームページにある行方不明者名簿。10 月 24 日、伯父の名前を見つけた。すぐに母に電話する。すでに知っていた。昨日、母のもう一人の兄より連絡があったとのこと。

葬儀は暫くして、大船渡で亡くなった人々との合同葬儀。母と親類が出席。母より実家の跡の様子を聞いた。自分も google などで知ってはいたが・・・。

いつかは行かなくてはと思いつつながら、現実を見た瞬間に心の中にある景色が変わってしまう。そんな気持ちがあった。

平成 24 年 2 月はじめ、母のもう一人の兄も亡くなった。2 月 10 日、葬儀のため大船渡に向かう。葬儀は午後 1 時半より。仙台を 9 時に出発。やっぱり今のうちに母の実家の跡地を見ておきたい。

三陸鉄道の盛土のボックスを抜けるとそこは何も無い世界。母の実家の跡地には石垣と家屋の基礎だけが残り、塩竈石で造られたという蔵の姿も無く、石垣の下に塩竈石が散らばっている。子供の頃よく遊んだ磯の潮だまりはすっかり海に沈んでいた。

葬儀、親類と久しぶりの対面であった。津波で家を流された親類も元気そうであった。そう、現実を受け止めて頑張っているのだ。

< 復 興 >

1000 年に一度と言われる大地震、そして大津波。日本列島が誕生してから何度も繰り返されてきたであろう出来事。しかしながら、人類にとっては数少ない経験。そして復興への道なり。

元の美しい景色を取り戻すまでに何十年かかるのであろうか。その頃には越喜来にも高さ十数mにも及ぶ防潮堤が出来ていることであろう。

復興とは始まりがあり、いつかは終わりがあること。だが、終わりとなっても決して忘れられることのない言葉。100 年先の人にこう言ってほしい。「この防潮堤は平成の大津波の復興の記憶なのだ

以 上

一番大切なもの

保全 2 部 K.A

震災後、しばらくたった夕食時に、「今回の地震では何が一番大切だと思った？」と子どもたちに聞いてみました。それぞれに、思うことを話し出しました。

長男は「食べ物」、長女は「ライフライン」、父親は「ガソリン」。そして次男が「いのち」と答えました。

みんな、なくて一番困ったものを思い浮かべたようです。長男は育ち盛り。あのころは肉が食べたいと何度も言っていました。長女は暗い夜をすごし、きっと怖い思いをしたのでしょう。大人は少々のは我慢できますが、ガソリンがなくては始まらないと、深夜から何時間も並び、ようやく手に入れたという貴重な体験をしました。

「いのち」と答えた次男は、どんなことを考えたのでしょうか。彼なりに学校やテレビで、色々な情報を仕入れたことでしょうか。いつもはハチャメチャな次男ですが、一番大切なことをちゃんとわかって、声に出して言うことが出来ました。他の子どもたちも「いのち」が大切なのは分かっているとは思いますが、本当の大切さを実際に目で見て感じてほしいと思い、長らくためらいながらも、震災後 8 ヶ月立った頃、甚大な津波の被害を受けた沿岸部に連れて行くことにしました。

まだ子どもたちが小さい頃、海水浴といえば北上方面の長面によく行きました。浅瀬の海が広がり、波が穏やかで、子どもを遊ばせるには最高のところでした。今でもはっきりと覚えています。石巻方面から車を走らせ、新北上大橋を渡ってすぐ左に曲がり、堤防を下って道なりに進むと左側に石碑があり、すぐ右手に大川小学校が見えてきます。校庭には立派な土俵がありました。更に道なりに進むと、右手に小さな郵便局、小さな商店。そこで菓子パンやお菓子を調達しました。だんだん道は細くなり、対向車とすれ違うのも困難で、最後は行き止まりの一本道です。

震災後訪れたときは、自分の目を疑いました。何もないのです。テレビで見た瓦礫の山は撤去され、道路もなく、建物もありません。その中に、津波の犠牲になった大川小学校がありました。花を手向けに来る人が絶えず、子どもが大好きなお菓子や、漫画、そして夜のためか大きな照明もありました。子どもたちはまだそこにいるような気がしました。

あの道を、子どもたちはどのように非難したのか、どんなにか怖かったことか。犠牲になった子どもたちを思い、その御家族のことを思うと胸が潰されるような思いでした。

子どものために連れて行ったことですが、私自身が現実を目の当たりにし、ショックを受け、本当に「いのち」の大切さを実感しました。今目の前にある生活は、決して当たり前のことではなく、とても幸せなことであること。本当に当たり前で、誰にでも分かることですが、今回の震災で強く強く感じました。

私の子どもたちは元気に育っています。このような大きな震災の後も、以前と変わらない生活をしています。電気、水道がなく不便だった生活、自分が生きていられる幸せを忘れないように、毎年 3 月 11 日はろうそくデーとしました。当時 2 歳だった末っ子が、大きく成長し、家を出て行くまで続けていくつもりです。

以上

3.11 東日本大震災 建コン道路部会の対応

計画部 M.O

震災レポートの作成にあたって、改めてこの1年半の記憶をたどりましたが、年齢のせいあまり思い出せないのが実情です。社員の皆様は、災害復旧関連業務で大変忙しい日々を送られたと思いますが、私自身記憶に残っているのは、建コンとしての対応・調整に追われ、ほとんど社業に貢献していないという思いです。ここでは、「今後、忘れないために」という思いも込めて建コン道路部会での災害業務の対応について報告いたします。

建コンでは、震災直後から東北地整をはじめ、県内各土木事務所からの支援要請に基づき活動してきました。特に浸水域を抱える仙台、東部、気仙沼の各土木事務所では、対象範囲が広範囲なに加え、市町の管理する道路も対象となりました。

最初にやることは、発注者と打合せを行い、作業の概要や工程を確認した後、区域を分割、担当会社を決定し依頼することです。道路部会に所属する21社で分担するわけですから、1社で何地区も担当するのは当然です。各社とも無理な依頼を快く(?)引き受けていただき、本当に頭が下がる思いでした。特に苦労したのは、作業方針などを調整することです。分担後は、各社個別に対応してもらいましたが、発注側も各自治体からの応援部隊のため統一した見解が示せず、幹事会社が窓口になって水平展開を図らなければなりません。

今回の震災で特徴的なことは、地盤沈下により沿岸部では冠水する区域が発生したことです。査定方針として、「道路に損傷はないものの、常時冠水する区域は道路の機能が損なわれた」という解釈で査定の対象になることが決定されました。私が幹事として担当した気仙沼土木事務所では、「浸水区域での現地調査や測量、設計の作業方針」や「常時冠水区域の復旧方法」、「冠水区域における路床強度低下の検証」などの資料を作成し、合同会議により意思統一を図りました。

冠水区域は、「路面が各地区で設定される海水面(HWL)より低くなる区域」と定義、周辺の土地利用は未確定ですが、この区域の道路を全て嵩上げすることを前提に復旧費用を算出しています。前述のとおり、冠水すれば道路としての機能を果さない訳ですが、合わせて冠水箇所の路床強度を評価し、査定資料のバックデータにしたいという要望がありました。気仙沼市鹿折地区をモデルに冠水区域と非冠水区域で路床強度の違いを評価するため、FWD試験(掘削せず路面から路床の評価をする試験)やCBR試験を行い、結果として冠水区域では路床強度が低く、非冠水では路床強度が高いという傾向を得ることができました。

今回の震災では、道路台帳等の図書流失や瓦礫による現地作業の遅延、地盤変動に伴う基準点の改測、各工種間の復旧方針の調整など様々な課題を克服しながら、昨年12月に全ての査定が無事終了することができました。

しかし、目に見える復旧・復興活動は、これからが本番です。我々建設コンサルタントが地域のホームドクターとしての存在価値を再認識し、今後の業務遂行に努めたいと思います。

最後に、

震災で多くの「かたちあるもの」が失われましたが、代わりに人間の温かみを知ることになりました。電気もガスも食べ物もない状況で物資を送っていただいた方々や、業務の支援に来ていただいた方々に心よりお礼申し上げます。

以上

東日本大震災と社会貢献活動

計画部 Y.T

2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震発生。

震災直後から5日間、実家である気仙沼の両親や親戚の安否がまったくわからず、この間、自分でも情けないことにオロオロし、前を向く気持ちになれなかったことを思い出します。

しかしながら、震災から数日が経ち、一番町のアーケード街を歩くと、普段絶対見られない光景を目の当たりにしました。そこには道端で、無料でマッサージや炊き出しをする元気な商店街の人々の姿があったのです。通常、路上では露店やイベントを行う際、警察署や仙台市に道路使用(占用)許可の申請が必要なのですが、ダテ(粋、クール)な計らいだったようです。

震災から1週間が経ち、私はといえば、誰から頼まれたわけでもなく、東北学院大学のY教授と石巻や気仙沼の被災地に、首長さんなどへのインタビュー行脚を行っていました。

被災地の凄まじい惨状に声も出ず、ただ話を聞いた方々に、逆にパワーをもらい。石巻の中心商店街では、流され、放置された車に書かれた「明けない夜はない」という言葉に狩猟採集民族のポジティブなDNAを感じ、すでに復興への歩みをはじめていることに東北人の真の強さを見ました。

それ以来、なにかに動かされるように、あがきながら、ベガルタ仙台のアウェイ再開戦のパブリックビューイング開催(いろは横丁)。会長を務める異業種交流会(仙台はなもく七三会)での震災シリーズの開始。石巻市北上の十三浜では仮設住宅の方々と酒を酌み交わしながら、将来のまちの姿を語り合い。発災から1年となる節目には、『鎮魂と未来、そして希望』をテーマとした仙台市中心部商店街希望プロジェクトと、逆らえない力に抗うように、自分にできることを仲間たちと企ててきました。特に前述のプロジェクトは、被災地が復興・発展へ向けて歩み出したことを全国へアピールし、地元はもとより風評被害により減少している観光客に商店街を訪れてもらうきっかけとするとともに、未来に向けて東北が発展する希望のひかりとなることを目的としたものでした。このプロジェクトでは、発災から1年後の同時刻に黙とうを行い、一番町と中央通り全体の商店街が、昼間としてはおそらく初めて、黙とうの合図とともにシンとした静寂に包まれことに正直感動しました。

東日本大震災以降、石巻の復興計画や女川の復興事業に携わるとともに、社会貢献活動として「東北お遍路プロジェクト」を企画しています。これは「四国八十八カ所」のように、1000年後まで語り継ぎたい巡礼地を、被災地から公募し、全国はもとより、全世界から慰霊・鎮魂のための巡礼者を呼び込み、被災地の自立的な活性化につなげようという活動です。興味のある方は是非、ご協力いただければ幸いです。

以上

▼明けない夜はない



▼路上マッサージの風景



▼3.11 鎮魂と未来、そして希望



東日本大震災の記録

計画部 H. I

◆震災発生

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分太平洋三陸沖を震源として、M9.0 の大地震が発生し巨大津波によって死者は 15,000 人を超え、現在も行方不明者が 2,000 人以上となっている。私は当時、大阪府〇〇市の職員として上下水道局 2 階で勤務していた。震災直後、フロアにいるすべての職員の手が止まり、皆が互いの目を確認しあい、同時に建物の異様な長周期な横揺れに行動を停止した。インターネット配信により、映画と想像するくらいの津波被害の状況が次々に流され、その被害の甚大さを各々が確認した。

〇〇市庁内では、年度末の退職者への慰労会や、年度初めの新入職員歓迎会等の全てをキャンセルし、被災地、被災者への追悼を心から念じていたことを覚えている。義援金は庁内のあらゆる諸団体から集められ、当時の福祉総務課へ現金で納められた。〇〇市の職員の中には東北地方に親族を持つ者は少なかったが、阪神大震災の支援や救援を心から感謝した経験をもつ職員が大勢在職しており、その恩返しの気持ちもあったのであろうと思う。

◆大阪で感じた心境変化

私自身、小学生入学間近の娘がおり新聞報道等で同年代くらいの子供たちが亡くなっている現実を、何度も説明した。今、普通に学校へ行けること、普通に食事ができること、普通に笑顔でいられることが本当に幸せであることを伝えた。

表 1 被災地応援ブロック一覧

その後、勤務先では「全国都道府県における災害時の広域応援に関する協定」に基づき、人的支援要請があった(表 1)。同協定は、災害時の協力体制について全国自治体をブロック分けし、効率的な支援活動を実施するためのもので今回は応援ブロック第三順位として近畿ブ

| | | 応援ブロック | | | | | |
|-------------------------|-------|--------|------|-------|------|------|-------|
| 順位 | | 第1順位 | 第2順位 | 第3順位 | 第4順位 | 第5順位 | 第6順位 |
| 被災地 ブ ロ ッ ク | 北海道東北 | 関東 | 中部 | 近畿 | 中国 | 四国 | 九州 |
| | 関東 | 北海道東北 | 中部 | 近畿 | 中国 | 四国 | 九州 |
| | 中部 | 近畿 | 関東 | 北海道東北 | 中国 | 四国 | 九州 |
| | 近畿 | 中部 | 中国 | 四国 | 関東 | 九州 | 北海道東北 |
| | 中国 | 四国 | 九州 | 近畿 | 中部 | 関東 | 北海道東北 |
| | 四国 | 中国 | 九州 | 近畿 | 中部 | 関東 | 北海道東北 |
| | 九州 | 中国 | 四国 | 近畿 | 中部 | 関東 | 北海道東北 |

ックは該当する。私は在職 7 年、民間経験時代を含めると、社会人としてまた土木技術者として 10 年というキャリアを社会貢献への一途として活用すべく名乗りを上げた。派遣前研修では、先遣隊の報告や心構え等を受講した。発表者に対する講演後の拍手は控えるよう伝えられ、発表者の疲労感の表れを見ると、被災地の悲惨さを感じ取れるようであった。

◆東北の地にて

しかし、派遣命令が下されないまま 1 年が過ぎようとしている現実、被災地への意識は徐々に高まり、単身で被災地を訪れることを決断し、現在本社に勤務している。本社採用を得るまでの数か月は被災地の視察やボランティア活動等を行い、被災地の現状を体感した(写真 1,2)。本社では計画部に配属され主に女川町の復興に関わる基本構想、基本設計に携わっている。今後も被災地の復興へあらゆる形で携わり、少しでも自分の力を社会貢献に繋げていけるよう努める所存である。

以上



写真1 現地視察 (石巻市)



写真2 現場視察 (女川町)

震災がつないだ絆

計画部 T.S

東日本大震災から 2 年以上が経過し、その日の食事さえ満足に摂れない状況ながら日夜復旧業務に奔走していた当時を懐かしむことがある。しかしそんな苦しい生活の中でも私達が駆け抜けてくることができたのは、人と人の助け合い、励まし合いの賜物ではないだろうか。私は本レポートにおいて、震災当時から現在に至るまで、震災や、その後の災害復旧業務を通じて体感した人間のつながりの強さと、私達のこれからについて述べさせて頂く。

震災直後、社内でも炊き出しやおにぎり等、量が限られている中でも提供され、私も出張前に頂戴することがあった。1 杯の炊き出し、1 つのおにぎりにこれほどまでに感謝しことはこれまでになかった。これらの食材の中には復建グループ各社から、支援物資として送って頂いたものも多く含まれていた。これまで、業務ではグループ会社としてのつながりを感じる事があまり無かったが、この行為に感謝すると共に、復建グループとしての誇りを感じた。また、業務支援として多くの方に当社に来て頂き、現場作業や内業等、災害復旧業務の消化に大いに貢献して頂いた。特に私にとって、これらの方と共に仕事をし、交流した経験は今後のかけがえのない財産になることは間違いないであろう。彼らは私の復旧設計業務の補助として入って頂いたが、設計技術的な面や資料作成の方法、業務工程等、業務に関わる全ての面でバックアップして頂き、的確なアドバイスを下さった。私の段取り不足でご迷惑をお掛けしてしまうことも多々あったが、常に私を励まし、時に叱責し方向を正して頂いて、心強い存在であった。彼らも各々の会社が多忙な中、遠方での慣れない土地で生活すること、仕事をする事に不安を抱いていたであろう。そのような状況の中でも精一杯に我々の力になって頂いた。災害査定等もあり、昨年度は震災直後から休むことなく業務多忙期間が続いたが、私は彼らの力なしにこの期間を乗り切れることは不可能だったであろう。また、仕事面だけでなく、プライベート面でもお付き合いさせて頂くこともあり、家族や地元、趣味の話等、様々な話題について聞かせて頂いた。仕事を共にするだけでなくプライベートでもつながりを持つことができ、より彼らを近い距離に感じる事ができた。

震災から約 1 年半が経過した頃、彼らが宮城県を訪れるということで、再開することができた。宮城県という土地に愛着を感じ復興の状況をその眼で確認したく来て頂いたこと、私は、短い期間ではあるが共に汗を流した我々にまた会いに来て頂いたということを大変嬉しく、感謝しており、「ありがとう」という言葉では言い表せない程の思いである。

東日本大震災という未曾有の災害で甚大な被害が発生し、多くの人が悲しみにくれた中、人と人とのつながりや絆に、温かさや感謝を感じた人も多くいただろう。私もまたその一人である。自らの状況を顧みず復旧・復興のため、いち早く行動を起こした沢山の方々とその美しい行動に感謝の思いは尽きない。この思いを何らかの形で還元していかなければならないと考えている。例えば、災害復旧支援を必要としている地域があれば進んで現地に赴き力になりたい。業務支援に留まらず、自分のできることであれば進んで行動したい。我々がそうして頂いたように。会社・組織としても、そのような体制が整えていければ好ましい。震災を経験し生活面、仕事面での苦しさを体感した一方、人と人とのつながりや絆を多に感じる事ができたことは私の大きな財産であり、これからの生活の糧となるだろう。

以上

3月11日から599日、壊滅した被災者・自治体復興とどう向き合ったか

計画部 Y. I

東日本大震災(2011年3月11日)から二度目の秋を迎えた。被災地によりやく復興の槌音が聞こえ始めた。「復興が遅すぎる、もっと早く、スピード感を持って」、「この復興計画は一方的だ、被災者の理解と合意を得ていない、移転しない」、「計画の熟度が足りない」などの意見が多く流れている。被災地はどうなっているのか、技術者は何をしてきたのか、599日(1年7ヵ月)間を報告する。

1. 3. 11から60日間、被災地ボランティア(技術支援)

神田事務所8階で第三者照査会議の終了間際に遭遇した。激しく大きく長い揺れが続いた。震源が東京より遠方であることは、長い揺れから容易に判った。しかし震源がどこか。事務所の外へ、ビルからの避難者が車道に溢れていた。数分間隔の余震の都度、ビルから窓ガラス破片が落下しており、歩道は危険であった。避難者の会話から「仙台が震源、大津波警報が出ている」が聞こえてきた。

1978年宮城県沖地震、1990年宮城北部地震、2008年岩手・宮城内陸地震と数回の大地震を経験した私は「仙台の宅地被害の発生」を心配、支店に戻りながらそば屋のTVで地震のヘリ報道を「何だろう?」と画面を覗いた。仙台空港に來襲してくる津波の白波だった。一瞬身体が強張ったが、「仙台に何が起きているのか」を図りかね、呆然としていた。「とにかく支店に行けば」と歩を早めた。

翌土曜日の大阪の学会役員会をキャンセル東京支店に戻った。本社と安否確認をしていた。名古屋出張の社員は北陸・山形から仙台に入ると連絡有。私は家族の安否が気になった。「メールが早い」と教えられ確認できた。新幹線はストップし、孫の家に、ようやく3月21日仙台に戻った。

本社は、被災地の復旧支援・被害把握を日夜取組んでいた。帰仙した私は、壊滅した市街地復興をどうするか、まちづくり技術者としての不安があったが、21日目の4月7日に(財)県住宅建築センター・大学・新建築家技術者集団みやぎ支部と「沿岸被災地復興情報交換会」を開催した。沿岸部の被害規模が膨大で立入り制限などもあり、被害の全容把握には相当の時間を要すること、復興計画は、複雑・複合力・総合力・学協会連携が必要であること等を確認した。

(その日の深夜、23時32分M7.4最大余震が発生した。青葉区6弱、自宅本棚整理に夜中まで)

以後、宅地・マンション被害報道が余りにも少ない事が判り、所属学会(新建宮城・東京支部)と連携し、5月末迄に県内5市町18町内会530戸の宅地・マンション被害の土日相談会を実施した。

1978年宮城沖地震同様の地盤災害(盛土沈下・沢の崩落・段差)が発生しており、「信頼できる技術者の紹介とアドバイス、行政との対応策・発生原因・工事費、支援制度」などの相談があった。

相談会では、新潟地震での国交省宅地擁壁復旧支援などの制度と技術資料を配布し説明した。

同時期、新建代表幹事より「〇〇町は復興計画策定委員会を立上げ、〇〇大学名誉教授が座長となる。〇〇町復興基本構想委員会の復興策定の技術サポートをボランティアしてくれないか」と要請され、5月～8月まで支援した。〇〇町は、津波で流出した家屋・家具が町中に溢れ、ビル屋上や山腹斜面にも横転車両が多く残されていた。町職員は高台小学校校舎の一部を役場庁舎に間借りし被災者支援に奔走していた。委員会傍聴に伺うたび、大きな黒バエがたくさん飛び交う中、廊下ですれ違った児童からの「こんにちは」の元気な挨拶に、逆に励まされる場面が多かった。

県外からの復興計画支援は、関西広域連合や兵庫県震災研究センターの「NPO・コンサルの人材の被災地派遣、地域資源活用型仮設住宅、復興は被災者主役・・」等の提案が多くあった。(役立った情報は3月12日立上げた「新建築家技術者集団復興支援会議」の情報が網羅的であった)

2. 被災市街地復興計画上の課題(パターン検討業務)

5月下旬からは、〇〇局「市街地復興パターン検討業務:略称②調査」プロポ公募を受け、〇〇町復興計画を〇〇研究所と共同で取組んだ。「復興パターン検討業務:②・④調査」は、被災地の特徴に応じた復興パターンを立案するもので被災地の特徴に応じた復興パターン計画が求められた。

業務上の留意点・注意点・配慮等は各コンサルに指示された。「被災地は甚大な被害を受けており、復興は複雑である。被災地復興制度が極めて不十分である。制度改正を待つことなく被災者の一日でも早い復興を進めるため、復興計画は現場の状況に応じて取り組むこと。被災者の心情に配慮する事、自治体職員は被災者救援が急務であるので、通常のコンサル調査依頼は厳に慎むこと、丁寧・積極的に自から調査する事」等、気配りのある丁寧な指示であり技術者を激励した。

〇〇町は、津波で全資料が流出、また職員は住民対応が急務となっており、自治体資料収集は県庁や関係官庁を調査して対応した。現地立入制限(被災者の流出財産の盗難防止)もあることから、航測図・住宅地図を収集し、「被災地現況調査」(別業務)等から中心部・離半島部の復興パターン計画(素案)を8月末に第一案を立案している。俗に言う、「たたかれ台の計画図」である。

10月には町仮庁舎も完成、町内の混乱も徐々に落ち着き、新首長・新議会が立上り、まちづくり計画の調整、11月の総復興事業費提出、国会への制度要望や事業費資料等を報告している。

12月には復興5省40事業制度が公表されたが財政・法律改正などでの課題などが求められ、また、毎日の業務報告も必須で、極度の緊張がほぼ10ヶ月続いた。一歩間違えば、町や政府・住民への復興を遅らせる事になるので作業は連日深夜までであった。「出来たか？」から「健康に留意して下さい・・・」の言葉は、緊張続きの担当技術者に唯一の精神的安堵感を与えたといえる。

「住宅地は安全な高台移転とコンパクトシティ」の首長公約が基本で、どのような復興まちづくりが可能か、ゼロからの計画であった。町内には土砂法規制や課題が多くあるが、まずは計画を急ぐ事、復興予算の規模算定が大きな課題として復興計画素案作成を優先した。課題検討は次年度以降の作業とし、概略の復興事業費と次年度の復興交付金を取り急ぎ必要とし、計画を進めた。

「住民主体のまちづくりや合意形成・スピード・事業費・多様な価値観、技術的解決策・・・」等、職員や技術者間調整が不十分なまま、これでいいかとの激論が交わされたが、次年度の課題とした。

特に、①過疎を加速した津波災害からの復興 ②復興スピード感ある技術者の協働作業と計画、③住民合意と制約条件下での技術採択などが大きな課題である。

3. 残された課題(被災者メッセージ、次世代負担)

これらから、3.11のM9地震は、農業・水産漁業等で暮らす112万戸約250万人に大被害を与え、また貞観地震(869年M8.3)、慶長三陸地震(1611年M8.1)を超える、超巨大地震であったと考える。

599日目の現在は復興基本計画・事業認可図書申請中である。他地域からの派遣職員や支援者から、「東北の被災者は我慢強い、復興計画にほとんど反対しない、説明会が静かだ、首都圏や関西ではありえない」と言われているが、本当であろうか。この間の住民意向調査で、回答者の7割が「非常に長い記述」を綴っていることは、何を物語っているのか。ぜひお読みいただき考えてほしい。

被災者が復興を考えると、「ゼロからではなく、マイナスからのスタート」に、膨大な復興費を次世代(将来)に負担させる事に悩んでいる、解決策が見えないのではない、発信できないのが、「無言」となっているのではないだろうか。ここをどのように理解するかで、復興のあり方が変わって来るのか。

高村光太郎の詩集(道程)の一節、『僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる ああ、自然よ……』を、ふと思い出させた。誰もが、真の復興とは何かに悩んでいる。でも前に、前に、である。

以上

災害対策本部と派遣要請対応

技術管理部 T.T

1. 直後の対応

派遣要請対応は、3月11日の国道4号〇〇地区のり面緊急点検から始まった。

3月12日(土)以降、要請件数は一日毎に10件、13件、19件と増加し、その内容は道路、橋梁、トンネル、斜面・のり面、公園、宅地、ため池、上下水道等、インフラ全般に及んだ。発災後1週間で72件、延べ220人を現場に派遣した。その後、点検・調査・仮復旧設計を含めて5月の連休前の4月27日(水)までの要請件数は280件、延べ590余名の人員を派遣した。

毎朝、災害対策本部である社長室に集合後、社員に寄せられた客先からの派遣要請内容と派遣者名をホワイトボード(写真1)に書き込み写真を撮影すると共に、A3版の紙(停電でパソコン使えず)に手書きの「要請一覧表」を作成し記録した。記録は、要請先・要請者・要請内容と派遣した職員名、緊急連絡時の電話番号等を記載した。これらの記録は、2008年に発生した「岩手・宮城内陸地震」での経験が大いに役立った。

大きな余震と津波発生の危険が続く中、電話がつかない場所や安全か否か確認できない現場に社員(数名のグループで)を派遣することになった。ホワイトボードに書き込んだメンバー全員が会社に戻ったことを確認後、写真撮影により記録し、その日の書き込みを消して次の日に備えた。

現場到着後は、必ず津波の際の避難場所の確認と一日一回の電話連絡の徹底を伝えて派遣したが、緊張の毎日であったことを記憶している。

現場派遣の人選では誰一人として不満を口にするものはいなかった。被災地までの道路を優先通行できる緊急車両証明書の手配、数十台分の車の燃料(ガソリン)の確保、現場で食べる昼食のおにぎりや飲料水の確保、携帯カイロ(かなり寒かった)、携帯ラジオや懐中電灯の確保等は、会社で待機する社員がバックアップした。これらスムーズな行動や対応は、これまでの社内BCP訓練の成果である。後に永年勤続表彰の記念式典のスピーチで、ある社員が当時を振り返り、「毎日危険な現場に向かう社員を見送るとき、兵士を戦場に送る家族のような感じがした」というような表現をされたと記憶しているが、当時はまさにそのような状況だったと思う。

2. 災害対応七つ道具

3.11以降、客先からの被災状況調査要請に対応すべく、災害対策本部を立ち上げ「朝夕二回の本部会議」を開催し今日に至っているが、情報の集約と早期対応を行う上で大きな役割を果たした。

災害対策本部で準備すべき災害対応「7つ道具」は以下のようなものがある。

- ① 要請一覧表(最初は手書き)
- ② 毎日の出勤者名簿(本部長指示)
- ③ 社員電話番号一覧表(作業指示や安否確認)
- ④ 要請先の電話帳、事務所の座席一覧表
- ⑤ 災害協定書類(国交省、宮城県、仙台市、建コン・宮測他各協会、復建グループ他)
- ⑥ 地図(各管内図、道路地図)
- ⑦ メモ用紙
- ⑧ 災害査定資料等

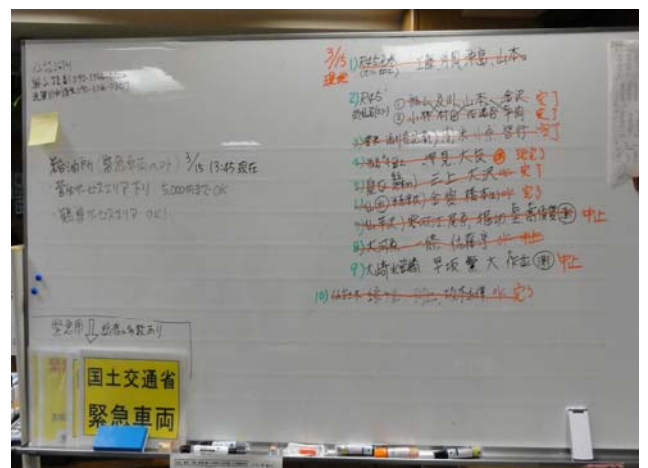


写真1 ホワイトボード記録状況

3. 被災地の技術者として

我々被災地の技術者は、一日も早い復旧のために緊急点検や崩壊現場の調査・設計を通して地域に貢献した。

地震を直接体験した技術者として、我々が果たした役割を国民に判りやすく説明することや、津波域のインフラ整備の有り方についての提言、消失を乗り越え再生させた街づくりの取り組み手法、ガレキ処理や放射能対策、世界的にも例の無い都市内の大規模宅地変状対策、新しいインフラ点検手法や補強技術・改修技術やガレキを含む再利用等について、これまでの実績を整理し、想定される東南海地域の防災対策や資源循環型社会に向けて活用・提案を行う必要がある。

以 上

1. その時私は

平成 23 年 3 月 11 日、私は秋田県庁道路建設課で道路予備設計の最終取りまとめについて打ち合わせを行っていた。13 時からの協議も順調に進み、和やかな雰囲気であると最後の課題という時であった。

突然「ビービー」と携帯電話が鳴りだし、「あれ、マナーモードにしていたのに？」と思いつつ、中座しようとした時には、部屋のあちこちで携帯電話が地震の予知情報を報じる警戒音と共に鳴動していた。

それから激しい揺れが、それもなんと長く感じたことか。これまで経験した本震でこれほど長い時間激しい揺れを感じたことはなかった。揺れの大きさとその長さに尋常の地震ではないと感じ、胸騒ぎを禁じ得なかった。

打ち合わせは中止となり、秋田支店に立寄って新幹線の状況を確認したところ運転中止。直ぐ近くのレンタカー店で車を手配し、R46 号を盛岡に向け帰路についた。

盛岡市内に着いたところは漆黒の闇。街の灯りは途絶え、信号機も止まったまま。情報はラジオから流れる臨時ニュースが、あちこちで災害が起きたこと、津波への警戒を促していた。何がどうなったのか、外の暗闇のように全体像が見えないもどかしさ。とにかく家に帰ろう。

2. 文明の脆弱性と人間性

信号機の止まった真っ暗な道は、早い者勝ちと言わんばかりに人間の本性むき出しの運転者が、心優しく、遠慮深い運転者を足蹴にするかのように、我が物顔で疾走していた。私はその勝馬に乗るようにその流れを捉え、今朝は何時もと変わりのなかった駐車場からマイカーを走らせ、どうにか我が家まで辿りついた。

「ただいま」と私。「おとうさん？」妻と子供達。部屋の中は、寒々とした中で淡くささやかなローソクの灯りだけが唯一の頼りであった。「水道は？」「今のところ大丈夫」と妻。「ガスは？」「使えるよ、電気以外大丈夫」と子供達。「そうか、停電でストーブはダメか」と私。とにかく、寒い。文明の利器は、電気無しでは何の役にも立たない金属の骸である。電気の恩恵に浴していながら、何とその危うさに無頓着だったことか。

災害に遭遇し、人を押し退けて我先にと突き動かす「野性」、躰や教育といった訓練で育まれた協調を優先する理性的「人間性」、見事なまで明暗を分けるその行動様式は、人の本性を露わにする。夕方立寄ったコンビニ、信号機の止まった道路、市井のあちこちで凶々しさが「控え目」を圧倒していた。これって野性!？災害後はこの対峙を幾度となく目にすることになる。

トランジスタラジオが、被災状況を伝えている。「しばらくは、大きな余震には気を付けて下さい。」「海岸線には近付かないようにして下さい。」「

もう来ないよ」と話す私の声は虚ろに響いた。

3. 災害は忘れたころに

岩手県花巻市出身の宮沢賢治は、「イーハトーブ」という理想郷を夢見た童話作家として有名である。

賢治は、明治三陸津波が発生した1996年(明治29年)8月27日に生まれ、昭和三陸津波が発生した1933年(昭和8年)9月21日に37歳の生涯を閉じている。その人生の始まりと終わりが、奇しくも三陸沿岸に大津波が襲来し、大きな被害をもたらした年と符合するというのは、理想郷を希求した賢治にとって皮肉な巡り合せである。

寺田寅彦の言葉として、「災害は忘れたころにやってくる」という有名な警句がある。但し、寺田自身は、「災害」が「忘れた頃にやってくる」のではなく、「忘れた頃にやってくる」から「災害」になる、という意味の文章を残している。

昭和8年(1933年)から78年経過した2011年、忘れたころにやってきた大津波により、多くの死者、

行方不明者が災害という名のものにこの世から連れ去られた。

4. 同じ轍を踏まないために

震災後、一般国道 45 号の災害復旧のために三陸沿岸野田村の現地調査に赴いた。そこで目にしたものは、見渡す限りの瓦礫の山と行方不明者を捜索する人々。国道 45 号の現況写真を撮りながら、無残に破壊された街並みはあまりに壊滅的で写真に収めることができなかった。

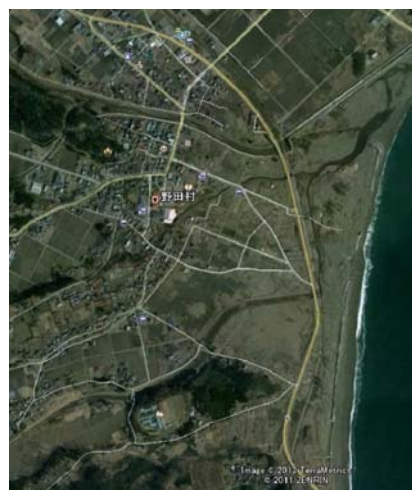
我々は、この大震災から同じ轍を踏まないために何を学ぶべきか。防災に対する啓蒙を進めたとしても、また歴史が繰返すように災害にまた襲われるのではないだろうか。数十年、数百年のスパンで繰返される災害のサイクルタイムは、人間の一生に比して長すぎる。

では、我々は災害にどう備えるべきか。「糞に懲りて膾を吹く」ように、リスクから完全に回避した選択もある。また、避難が可能な範囲である程度リスクを取っても生活の質を優先するような選択肢もあると思う。

現在、グローバル化が進展し、「個人の裁量」とそれに対する「責任」が求められ時代となりつつある。

今後は、災害への備えにおいても「生き方」と同様に行政サービスにのみ頼るのではなく、自らの身を守る「自己責任」の覚悟が必要な時代になったのではないだろうか。

以 上



被災後の野田村

震災時の記憶を振り返って

設計部 M.M

1. 震災当日（平成 24 年 3 月 11 日金曜日）

震災当日は本社事務所にいましたが、突然始まった大きな揺れに只事では無いと感じました。建設コンサルタント会社の一員として、今後多忙な日が続くと考える余裕はありませんでした。

自宅は、沿岸から約 7km の場所に構えていたので、家族の安否を心配し、まずは帰宅して家族の無事に安心しました。10mの大津波警報が発令されており、自宅の標高が 7m程度であったこともあり、危険を感じ、近所の人と自家用車で仙台南 IC 付近のドライブインの大駐車場に避難して、車中で一泊しました。

2. 震災翌日（平成 24 年 3 月 12 日土曜日）

翌日早朝、9:00 頃に自宅へ戻る途中、会社（常務）より連絡があり、〇〇国道事務所からの災害対応の要請があり、帰宅後事務所に向かいました。

私の担当した内容は、三陸自動車道が緊急輸送道路としての利用が可能かどうか点検を実施することでした。点検は、4人一組になって、道路点検を行なう訳ですが、鳴瀬奥松島 IC から登米に至るまでの道路や橋梁について確認しました。まずは緊急輸送車両が通行可能かを確認するため、経験と知識による『目視』によるものでした。特に通行上の支障が大きかったのは、鳴瀬奥松島大橋の橋台部の段差でした。60cm 程度段差があり、土のうを積み重ねて車両が徐行しながらのやっと通行できる状況でした。三陸道の石巻港 IC 周辺は、道路が水没し、河川と水田の境目が分からないほど、一面に水面が広がっており、そのときは市街地の方はどうなっているのだろうかと思ったが・・・、想像もできませんでした。

3. 復旧業務（平成 23 年 3 月 16 日水曜日）

震災から一週間も経ていない日、夜 11 時に会社から連絡が来て、今度は南三陸町の国道 398 号の道路点検と今後の道路復旧に関する要請がありました。宮城県の担当者と戸倉駅付近を点検してみると、既に駅が無い状態。自衛隊も入っていないような道なき道を雪の舞う中、徒歩で 15km 程歩きました。車は斜面の高さ 10m 程度の位置に引っかかっていたり、建物にトラックが乗っていたりこの世の終わりの様な心境でした。また余震で地震速報が鳴ると、急いで逃げる…の繰り返し、疲労困憊していました。仮設道路は 3 月中に検討段階を終え、4 月からは工事着工しましたが、復旧はスピードが大事だと実感し、その仕事の手伝いを出来たことは誇りに思っています。



4. 改めて

震災当時は、大変な対応で当然疲れはあったと思いますが、それよりも何かできることや手助けできることはないかという心境でした。

業務は、ハードなスケジュールとボリュームを他の会社からの支援をして頂きながら対応した災害査定も何とかこなすことも出来、今後の人生においてもなかなか経験できないことでした。今後、もうこれ以上のないことを願いながらも、東日本大震災の記憶を風化させることなく、高い志をもって、公私ともに取り組んでいきたいと思ひます。

以上

私の震災体験

仙台支店 Y.K

【震災当日】

生まれて初めて死の恐怖というものを感じた瞬間でした。宮城県沖地震も経験しましたが、揺れの大きさ、揺れている時間の長さは今までに経験したことが無いものでした。あまりの恐怖に声も出ませんでした。とっさに実家の両親の事が頭を過ぎりました。要介護が必要な両親だけに心配でした。しかし、今日はデイサービスに行っているはず。「きっと大丈夫だろう」不安に思いながら自宅に戻りました。自宅マンションのエレベータは当然動いてはおらず、自宅まで階段で上がりました。部屋の中を点検すると本棚の上に置いてあったCD類が床に落ち、台所の電気釜が床に転がっている程度でした。部屋の中があまり被害にあわなかった事が幸いだったし、自宅に帰った時点ではまだ水道、ガスが出ていたので、とにかく水と食料の確保だと思い、お風呂に水をはり、あらゆる容器をかき集め水道水を貯めました。停電だった為、すぐに土鍋でご飯を炊きおにぎりを作りました。夜になると水道もガスも止まってしまったので、早めの対応がラッキーでした。余震が続く中、とても不安ではありましたが避難せず自宅にしよう決心し、どこかにあったはずのラジオを探しました。宮城県沖地震を経験しているのに、何の備えもない事にいまさらながら後悔する次第でした。ラジオが見つかり、やっと情報を知ることができました。ラジオからは「震度7、6強、大津波警報」の緊迫した放送が続き、「若林区の荒浜に多数の遺体が見える」との放送には凍りついてしまいました。映像が見られないなかでも、信じがたい事が起きているのだと感じ、余震が続く朝まで眠れない長い時間を過ごしました。

【震災翌日から】

震災翌日の早朝、信号も十分に機能してない道路状況の中、利府の実家に車で向いました。両親は散乱している部屋で何も手付かず状態でいました。地震当日はデイサービスに行っていたので、家に居なくて良かった。とにかく無事でいたことにほっと一安心。しかし居間の窓は隙間が出来るほど斜めになっていて、居間と台所の基礎部分がかかなり壊れ、居間を歩くと家が揺れ、傾いていることが解りました。2階の内壁は全部崩れ、後日の調査で結果は全壊でした。こんな状態での生活は困難と判断し、両親を連れて私のマンションで暮らすことにしました。二日後、一関から仙台に新幹線通勤している妹も職場の病院で被災し、新幹線も止まってしまい一関に戻れず、自宅は2人暮らしから5人となり、約2ヶ月間一緒に暮らすことになりました。

自宅の電気・水道は3日程で復旧しましたが、都市ガス復旧には約1ヶ月半かかりました。台所とお風呂がガスだった為一番苦労しました。調理には幸いガスボンベ式の小型コンロがあったので、電気が復旧してからは、電子レンジ・ホットプレート等の使用でどうにかしのげました。お風呂は朝から電気ポットで何度も湯を沸かし5人が終わるには半日がかりでしたので、ガスが出たときにはとてもありがたかったです。食料調達も大変でした。スーパーの中に入るのにも人数制限があり、買う個数も限定され、物が買えないことを初めて経験しました。それでも休日は妹と2人でリュックを背負ってあらゆる所で食料調達に歩きました。なりふり構わずといったところでしょうか。やはり家族の為となると女は強いなど実感した瞬間でもありました。

会社へは震災後3日目に出勤しましたが、炊き出しから始まりました。現場に行く技術者の皆さんへおにぎりを作る毎日でした。当初お米不足が心配でしたが、ありがたいことに次から次とお米が届きました。少しずつ救援物資も届き、人のあたたかさ、ありがたさを実感しました。

【震災を経験して】

今、我が家には相当数の防災グッズが揃いました。5年間有効な水、ご飯、パンの缶詰、懐中電灯付ラジオに携帯電話の充電ができる便利物、簡易トイレまで、震災の日にこれらがあれば助かったものばかりです。震災を経験して防災意識は高まりました。日ごろの備えが大切だと実感したからです。震災から1年半が過ぎ、少しずつ復興していくと共に人は忘れるもので、自分自身も普通の生活に戻ってしまっている中で、つい忘れがちになっています。「これではいけない」水やガスが出るというだけで、あんなにありがたく思っていたのですから、いろいろな事に対して感謝の気持ちと、物を大切にすることを続けなければならないと思うこの頃です。

以上

編集後記

東日本大震災から2年が過ぎました。犠牲になられた方々に対し改めて哀悼の意を表します。また、仮設住宅等、厳しい生活を余儀なくされている被災者の方々に対し、心からお見舞い申し上げますと共に、一日でも早く普段の生活に戻れますよう御祈念申し上げます。

震災発生から2年のこの時に、震災を体験した建設コンサルタントとしてこの記憶を風化させることのないよう「震災体験から学び、伝えること」と題して、震災体験レポートを発刊することといたしました。

震災体験レポートはほぼ全社員となる220余名から投稿頂きましたが、その中から、①震災体験 ②震災対応(復旧、地域づくり等) ③協会活動 ④家族・家庭等 について、代表する14編(4/1時在籍)を選定し、CSR(企業の社会的責任)の一環として公開することといたしました。

あってはならない大震災では有りますが、自然災害が多発するわが国において、これらの体験レポートが何かのお役に立つこと期待し編集後記といたします。

編集委員

東日本大震災を語り継ぐ

—震災体験から学び、伝えること—

発行：平成 25 年 (2013) 6 月 20 日

株式会社 復建技術コンサルタント

〒980-0012 仙台市青葉区錦町 1-7-25

